

章乃器年譜（初稿）

— 中国の「愛国」と「民主」との間に —

水 羽 信 男

はじめに

章乃器（1897～1977年）について僚友の鄒韜奮は、彼は「友人との激烈な論争を好み、相手の意見に納得するまでは決して譲歩しなかった。……しかし彼の性格を知っている人は、彼の心の中が大変に純粹で、熱烈で、少しの悪意も無いことを知っている」と回想している¹⁾。こうしたパーソナリティーの章乃器は愛国的で民主的な知識人の一人として中国近現代史に大きな足跡を残した。

たとえば中村義ほか編『新版世界人名辞典（東洋編）』（東京堂出版、1988年）は、次のように記している。

実業家・評論家・浙江の人。1935年以来、雑誌『大衆生活』等に論陣を張り、抗日論壇の花形であった。²⁾35年12月、沈鈞儒、王造時らの学者、ジャーナリスト、作家、自由映画人らを網羅した上海文化会救国会³⁾を組織し、機関誌『暴風雨』³⁾等を発行し、各種抗日団体の前衛的リーダーとなった。……そののちは民主建国会常務理事、⁴⁾49年新政協準備会代表となる。⁵⁾57年から始まる反右派闘争で批判された。

辞典の叙述を補足すれば、積極的に救国会運動を組織した章乃器は36年半ばに各救国会を結集する全国各界救国連合会（全救連）を成立させた。また救国会の重要文献を執筆し、ブルジョワ団体との連携を図るなどして積極的に活動している。そのため1936年11月に他の救国会運動指導者とともに、国民政府によって逮捕・投獄されたが（「抗日七君子事件」）、その直前の段階で上海各大学教授救国会理事、国難教育社理事、上海各界救国連合会理事、全救連宣伝

部長等の役職に任じていた。また、1949年以後は政務院政務委員、編制委員会主任委員、財政経済委員会委員、人民政治協商会議（新政協）常務委員兼財經組織長、中国人民銀行顧問等を歴任、52年には政務院糧食部部長に就任し⁴、1930年代から50年代にかけて中国の民族主義と民主主義との実現のために、重要な役割を果たした。

また章乃器は彼自身が企業経営に従事したこと、民主党派の中で最も中国共産党（中共）に近いと考えられていた救国会運動の指導者の一人でありながら、のちに救国会と一線を画すことになったこと、などの点で他の民主人士と比較して特異な存在である。こうした特徴的な人物の個人史的研究は、本来多様な側面をもっていた中国の民主党派（ないしは民主派）の研究を行う際に重要な課題となろう。

だが、章乃器に対する研究は、今日に至るまで十分な成果を挙げたとは言いがたい。回憶録の類は多数あるが、彼個人に関する専論的な研究論文としては唯一平野氏の業績が先行研究として指摘しうるだけであった⁵。こうした研究状況が生まれた最大の要因の一つは、章乃器が1950年代に右派分子として批判されたことであろうが、彼の政治活動が系統的にフォローしにくいという資料的な困難さも軽視できない。

筆者は章乃器に関する二編の論考を公にしたが、1949年以後に論議を集中せざるを得なかった⁶。本稿の目的は今後の研究の進展の基礎作業の一つとして、1930年代以前をも含んだ章乃器の一生に関わる出来るだけ詳細な年譜を作ることである。

なお、年譜作成のために主として参照した文献は以下のものである。

従来、文献検索はまったくの手探りで行っていたが、『辛亥以来人物伝記資料索引』（上海辞書出版社、1990年）の出版によりリファレンス作業は飛躍的に容易になった。ただし『辛亥以来人物伝記資料索引』には章乃器「我和救国会」（文献一覧②）が掲載されていないなど、若干の不備な点がある。また『右派分子章乃器の丑惡面貌』（一覧④）は反右派闘争の中、章乃器批判のために急速編集されたもので、どこまで歴史的な事実を語りえているかは疑問だ

が、『辛亥以来人物伝記資料索引』はこの本について何の注釈もなく、その存在を無視している。

ともあれ文献一覧・年譜初稿が完全なものであるとは思わないが、読者の参考に供したい。

— 文 献 — 覧 —

- ① 章乃器「我的研究動機和経歴」（『激流集』生活書店、1936年）
- ② 章乃器「我和救国会」（周天度編『救国会』中国社会科学出版社、1980年）
- ③ 章乃器「七十自述」（『全国文史資料選輯』合訂本82輯、1986年）
- ④ 章乃器「抗戰初期我在安徽的一段経歴」（『第二次国共合作在安徽』〔『安徽文史資料』25輯〕1986年）
- ⑤ 胡子嬰「我所知道的章乃器」（『全国文史資料選輯』合訂本82輯、1986年）
- ⑥ 胡子嬰「“七君子”獄中反誘降的闘争」（同前）
- ⑦ 許漢三「我所知道的章乃器」（『全国文史史料選輯』合訂本73輯、1986年）
- ⑧ 許漢三「章乃器和抗戰初期的安徽財政」前掲『第二次国共合作在安徽』
- ⑨ *晨曦「章乃器先生在重慶」（『龍門陣』1985年6期）
- ⑩ 鄭叔屏「章乃器与浙江実業銀行」（『上海文史史料選輯』48輯、1985年）
- ⑪ *何満子「悼念国士章乃器先生」（『中報月刊』1981年18期）
- ⑫ 章立凡「先父章乃器往事見聞録」（『人物』1984年1期）
- ⑬ 章立凡「章乃器伝略」（『中国現代社会科学家伝略』5輯、中国社会科学出版社、1983年）
- ⑭ 中国民主建国会・中華全国工商業連合会宣伝教育処編『右派分子章乃器的丑惡面貌』（工商界月刊社、1957年）
- ⑮ 「章乃器先生逝世」（『光明日報』1977年5月31日）
- ⑯ 史群「中国民主建国会主要創始人小伝：章乃器」（『人物』1981年2期）
- ⑰ 郭学虞「“救国会七君子”之二：章乃器的苦難与自述」（『伝記文学』1981年39卷3期）
- ⑱ 関志昌「章乃器（1897—1977）」（『伝記文学』1981年39卷3期）

- ⑲ ＊戚再玉主編「章乃器」（『上海時人志』）
- ⑳ 魏橋など「章乃器」（『浙江人物簡志』下、浙江人民出版社、1984年）
- ㉑ 「中央財政經濟委員會委員章乃器」（『新中国人物志』下、奔流書店、1940年）
- ㉒ 「章乃器」（『新政協重要人物志』週末報社）
- ㉓ 秦孝儀『中国現代史辞典——人物部分』（近代中国出版社、1985年）
- ㉔ 李盛平主編『中国近現代史大辞典』（中国国際広播出版社、1989年）
- ㉕ *Biographical Dictionary of Republican China vol I* , Columbia Univ. Press, 1967.

#年譜の叙述で出典が必要だと思われる場合は、一覧表の通し番号で示した。
また文献一覧に掲載されたもの以外を利用した際は、そのつど明示した。なお、一覧表のうち＊は筆者未見。

— 章 乃 器 年 譜 初 稿 —

- 1897年3月4日 浙江省青田県小瓊郷の破産した郷紳の家に生まれたと言われ
る（③・⑫）。しかしながら、彼の父は日本留学生で、長兄
は保定軍官学校で白崇禧と同級であり、弟の秋陽は共産党員
であった（⑤）。
- 1911年10月10日 辛亥革命勃発。
章乃器は十四歳にも関わらず一兵卒として革命軍に参加した。
その後、浙江省の省立甲種商業学校へ進学。
- 1918年 同校卒業、章乃器は浙江省実業銀行へ練習生として就職。そ
の後職場を替わるが、1920年頃実業銀行へ復帰する。
- 1927年11月 章乃器、『新評論』を創刊（1928年下半期に停刊）。
- 1928年5月3日 「五・三惨案」起こる（日本の山東出兵に伴う済南での虐殺
事件、「済南事件」とも言う）。
この事件に対して章乃器は、民族の生存の立場からすれば
「日本帝国主義者に対して宣戦しないことはできないのであ
る！」と指摘した。また、章が日本人一般ではなく、日本帝
国主義者に対しての闘いの必要を強調していることは、彼が
単なる排外主義に陥っていないことを示していると思われる
（⑫より、原載は「向日本帝国主義者——不是日本民族——
宣戦」『新評論』）。
- 同年、胡子嬰と結婚
- 1931年9月18日 「九・一八事変」（柳条湖事件）。日中十五年戦争の開始。
- 1932年1月28日 「一・二八事変」（第一次上海事変）。
以後上海の文化界の人々——沈鈞儒、鄒韜奮、陶行知、李公
樸、周新民らと十人組を組織し、晩餐会の形式で活動を進め
た。この組織が「救国会」の前身であるとされる（②）。
- 1932年3月1日 満州国成立。

- 同年、浙江実業銀行副総経理へ昇任（㉓）。
- 1932年6月 章乃器、中国征信所を設立する。この信用機関は当時高い評価を受けていたと言う（㉑）。
- 1933年1月 章乃器、「現階段的対日問題」を『新社会』に執筆（㉒）。
- 1934年5月 宋慶齡らの民族武装自衛運動の本格化。
章乃器もこの運動に参加。但し彼自身は、運動への関わり方は消極的だったと回想している（㉔）。
- 1935年8月1日 「抗日救国のために全国同胞に告げる書」（「八・一宣言」）
中国共産党は従来のソヴィエト革命路線を抗日民族統一戦線政策へ転換し始める。
同年、光華大学が章乃器を教授として招聘する。
- 1936年5月31日 全国各界救国連合会（全救連）成立大会（～6月1日）
- 1936年6月1日 陳濟棠（広東省）、李宗仁・白崇禧（広西省）らによる「北上抗日宣言」（西南事変〔兩広事変〕の開始）。
救国会は西南派からの二千元を受け取り、西南派との関係が形成される。
- 1936年夏 章乃器、浙江実業銀行辞職。
- 1936年11月22日 沈鈞儒・陶行知・鄒韜奮・王造時・李公樸・史良とともに逮捕（抗日七君子事件）。
当時高揚していた上海・青島の在華紡績工場のストライキと全救連とが深い関係にあると見なした日本が、国民政府に彼らの逮捕を要請した。
逮捕後の彼の行動に対しては弾圧に屈しなかったとする肯定的な回想が多いのだが、胡子嬰は「章乃器は蒋介石への親書を陳誠に託して、まず彼を救出する方法を講じるよう、わたし〔胡子嬰〕に向かって主張した。……陳誠と彼の腹心の趙志とはともに青田県出身者であり、章乃器と幼い頃から同学で深い誼があった」ことを紹介している（㉕）。

1937年7月7日 「七・七事変」（「盧溝橋事件」）起こる。日中全面戦争へ。戦線拡大にともない章乃器ら「七君子」釈放。

1937年9月1日 章乃器は9月1日付けの『申報』紙上で「すでに国策が確定した今日、我々は政治的スローガンを少なくし、積極的に建議しなければならない」と主張した（「少号召、多建議」）。『申報』は当時の中国では有数の発行部数を誇る大新聞であったが、彼の言論に対しては毛沢東が1937年11月12日付の論文で次のように批判した。

「一部の小ブルジョワ急進分子に政治的投降の動きがある（その代表は章乃器）……上海では『よびかけを少なくし、献策を多くする』という章乃器主義を批判し、救国活動における迎合的傾向を是正ははじめている」（「上海、太原陥落後の抗日戦争の情勢と任務」『毛沢東選集』2巻、東方書店、1972年。但し、この文献は『毛沢東集補巻』毛沢東著作年表（蒼蒼社、1986年）によると、『選集』以外の出典が確認できない）。

同年、上海陥落後、章乃器は香港へ逃れる。

1938年初め 李宗仁が安徽省政府秘書長就任を章に要請し、武漢で周恩来と会談の後、安徽省へ。秘書長に関しては蒋介石が不同意。そのため安徽省省政府動員委員会秘書長となり、その後暫くして省政府財政庁長となる。

その動機について胡子嬰が、抗日戦争前において章乃器の「目的は政府に投降政策を放棄させ、抗日救亡を実行するように促すことであった。〔章乃器は抗戦の発動をもって〕現在政府はすでに抗日を実行しており、目的はすでに達成した。そこで政府の統一的な指導の下、自己の力量をつくして抗日戦争の仕事に従事しなければならない」と考えていたと述べている（⑤）。

この点に関して章乃器自身も「当時、私の抗日救国の熱情は極めて高かった。〔それで〕香港で快適に過ごすことが出来ず、私は片時もこの場所に留まりたいとは願わなかった。一心にただ前線におもむくことを思い、条件と地位とは少しも気かけなかったのである。それで豊・黎の要請〔＝安徽省への招聘〕に即座に応答した」と回想している（④）。

当時、章乃器は財政庁長として新四軍に月3万元送金したと言われる。

章乃器が安徽省を離れるようになった理由については、「CC団と言われている反動グループが、安徽省内の国民党を牛耳るようになり、章乃器はその最初の犠牲者となった」と説明されている（スメドレー『中国の歌声』みすず書房、1976年、こうした理解は今日の回想でも同様である）。

1939年5月

章乃器は安徽省から重慶へ（②）。

重慶では蒋介石が中央訓練団での「受訓」を依頼したが、章乃器は拒絶した。また、「四聯総処」専員就任の依頼も拒絶。蒋介石からの要請には一線を画していた。

なお重慶時代に彼は上川実業公司（1940年6月）、ついで上川企業公司を設立（抗日後は昆侖映片公司を設立）。

1941年4月？

章乃器、救国会脱退

その要因について、胡子嬰は次のように説明している。日ソ中立条約締結に対する救国会の宣言に関して周恩来が時宜に適わずと指摘、沈鈞儒は宣言に対する再検討の必要を示したが、章乃器は「救国会は〔共産〕党の組織ではなく、自己の独自性および自己の主張を持たねばならない、と考えていた。……〔それゆえ〕彼は救国会が宣言を発表することは救国会の仕事であり、共産党に干渉する権利はなく救国会も再検討する必要はない、と考えた。彼は仲間から賛意を得られず

救国会から退出した」(⑤)。

救国会脱退をめぐって章乃器自身は、39年5月に重慶へ戻ってから「私は救国会の活動の範囲が狭く、工作も〔共産〕党の発言と行動とに重複しているだけなのを発見した。それではさらなる発展と拡大とは不可能であり、多大な影響を引き起こせない。……当時の重慶の民主運動では、左舜生の類の声が救国会の声よりも大きかった。私はここから次のような結論を得た。経済的な基礎のない政治運動は、最後には全て政客の活動に陥ってしまう。まさにこの種の思想が、後年私をして民主建国会の組織を發起させたのである」(②)と述べている。

- 1941年秋？ 胡子嬰と離婚(⑤)。
- 1941年12月8日 アジア・太平洋戦争勃発。
- 1944年12月 「工業経済研究所」創設。
章乃器は所長に就任。
- 1945年8月15日 日本敗戦。
- 1945年11月19日 陪都各界反対内戦連合会の成立。
章乃器は沈鈞儒・黄炎培・郭沫若らと共に常務理事に当選する。
- 1945年12月16日 董必武の委嘱を受けた陳鈞の建議により重慶で中国民主建国会（民建）が設立される。章乃器は、常務委員および会員組織部責任人となる(⑫)。
民建の章程草案などの重要文献は章乃器の執筆になるとされる（俞雲波・呉雲郷・趙寿龍『中国民主党派史略』上海人民出版社、1989年）。
章乃器は重慶で発行された民建の機関誌『平民』の編集委員となり、発刊の辞で次のように述べた。「大人先生たち〔国共両党〕が権力を争い利益を奪い合うことは、それが平和的

な搾取であれ、平和的な山分けであれ、あるいは暴力的な争奪・軍事的な闘争であれ、結果は犠牲となったものはすべて、多数の平民だということである。……私たちは中国にこのような一種の政治力量〔＝民主建国会のような中間派を代表する勢力〕が必要であると考え、かつこのような政治力量が不断に発展すると信じている。……私たちは純粋な平民への協力を願い、右に傾むかず左に加担しない」（⑤および中共中央党校中共党史教研室編『中国民主党派史文献選編〔新民主主義革命時期〕』中共中央党校科研弁公室、1985年）。

1946年1月10日 政治協商会議、重慶で開催（～1月31日）。

1946年1月11日 政治協商会議陪都各界協進会成立。

民建は章乃器らを派遣し、全国郵務总工会、三民主義同志連合会、中国経済事業協進会など23団体と政治協商会議陪都各界協進会の成立を準備させた（前掲『中国民主党派史略』）。

1946年2月10日 政治協商会議陪都各界協進会などは重慶の較場口で、陪都各界慶祝政治協商会議成功大会を開催するが、国民党特務の襲撃を受け、章乃器も傷を負う（較場口事件）。

章乃器は“陪都各界慶祝政治協商会議成功大会籌備会”の推薦で、重慶市商会を通じて各同業公会、市農会などの大会準備参加を要請する役の責任者となった。これらの活動により章乃器は国民党機関紙『中央日報』で、李公樸とともに名指して批判され、劉野樵により起訴された（前掲『中国民主党派史略』）。

1946年3月 国民党六期二中全会。

国民党の政協決議否認の姿勢が明確となる。

1946年6月 国共内戦本格化。章乃器、上海へ到着。

1946年7月11日 民盟中央委員・李公樸、国民党のテロにより死亡。

1946年7月15日 民盟中央委員・聞一多、国民党のテロにより死亡。

- 1947年春 章乃器、香港へ到着。民建港九分会設立（7月初め）
- 1947年10月27日 国民政府による中国民主同盟（民盟）の解散。
- 1948年1月 香港で民盟三中全会。共産党の武装革命路線を支持・擁護。同年、章乃器、一時上海へ。彼の上海行きの目的は民建左派の別組織を作ることだったとも言われるが、実現はしなかった（②③）。
- 1948年下半年 章乃器は胡子嬰への電文で、「大兄〔共産党〕の事業は壮大で、その前途は光明に溢れている」と述べ、共産党への傾斜を示す（⑤）。
- 1948年末 章乃器、香港から東北解放区（瀋陽）へ。
- 1949年1月22日 章乃器・沈鈞儒・馬叙倫・李濟深・章伯鈞・譚平山など55人が「我們対時局的意見」を發表し、中共の指導を承認した。
- 1949年9月21日 中国人民政治協商會議（新政協）開催（～9月30日）。新政協全国委員会常務委員に当選。
- 1949年10月1日 中華人民共和国成立。
- 1949年10月 章乃器、政務院財經委員会委員に任じられる。
- 1950年3月 土地改革法の公布。民建など民主党派も土地改革に参加。章乃器も四川省で活動。この時期、彼は「小ブルジョワジーは確固たる立場を持たず、多くの農民と接触すると農民の立場に立ってしまう」と述べたとされる（孟秋江「章乃器的“和平土改”の陰謀」⑭所収）。
- 1952年8月 章乃器、國務院糧食部の第一任部長に就任。
- 1954年8月 章乃器、全国人民代表大會四川省代表に選出される。
- 1955年 章乃器、民建中央委員会副主任になる。
- 1956年12月 章乃器、中華全国工商業連合会（工商連）第二期執行委員会副主任委員に当選。
- 1957年5月 章乃器、中国銀行常務董事に任じられる。
- 1957年6月 反右派闘争の開始。

- 当時、彼の言論は厳しく批判され、「1956年冬に民建は二中全会を開催した。彼は中央常務委員会にいくつかの原則的な意見を提出し、皆の討論に附した。主要内容は民族ブルジョワジーは、その特性を言えば二面性がないというものであった。また彼は民族ブルジョワジーは一個の革命的階級であると説き、全世界のブルジョワジーに蜂起をあまねく宣言した」と見なされた（胡子嬰「我所了解的章乃器」④所収）。
- 1958年1月18日（～26日）民建・工商連の中央常務委員会連席会議第29次拡大会議は、章乃器の民建副主席・工商連副主任の職務を取消。
- 1958年1月31日 章乃器の国务院糧食部部長の職を解任。
同日、人民代表大会の代表資格の停止。
- 1958年3月10日 章乃器の政協常務委員の職務停止。
- 1960年 政府の経済政策についての言及により、章乃器は再批判を受ける。
- 1963年1月19日 章乃器、民建を除名される。
- 1963年3月7日 章乃器の政協第三期全国委員会委員の資格の取消。
- 1966年8月 紅衛兵が章乃器を査問。
- 1977年5月13日 章乃器死去、享年80歳
- 1980年 章乃器の名誉回復

— 解 説 —

ここでは章乃器研究の今後の課題を明らかにすることで解説にかえたい。

まず章乃器の思想と活動との変遷を、年譜に即して考えると次のような時期区分が出来ると思われる。

I. 思想の形成期

（1897年～1934年5月；民族武装自衛運動の本格化）

- II 抗日民主運動のイデオログとしての時期
(1934年5月～41年4月?；救国会からの離脱)
 - (a) 盧溝橋事件（「七・七」, 1937年7月）以前
 - (b) 「七・七」以後
- III 重慶での経済活動を主とする時期
(1941年4月?～45年12月；中国民主建国会の設立)
- IV 民主建国会の指導者としての時期
(1945年12月～48年12月；中共の解放区へ)
- V 中華人民共和国での活躍を中心とする時期
(1948年12月～57年6月；反右派闘争での糾弾)
- VI 反右派闘争以後の時期（1957年6月～77年5月）

上記の五つの段階を経て発展した章乃器の思想を通時的かつ立体的に分析するためには、章乃器と中共との政治的な共通点・相違点を考察することも重要だが、まずもって彼の思想の論理そのものに即した研究をおこなうべきだろう。

そのために大要、次の二つの検討課題がある。

(1) 章乃器の「知の体系」および「経歴」から導かれた「歴史観（ないし世界観）」の構造の解明

——彼が理解したという「唯物弁証法」の実体や、彼が「社会が良くないことを理由に技術的な修養を放棄することはできない」とし、「“最少の労力をもって最大の効果”を得るという経済原則」を強調する思想史的な意味の検討。およびその検討を通じた「人類の任務は文化を発展させることである」とする彼の「歴史観」の構造分析⁷⁾。

(2) 章乃器が自らの中国社会論、すなわち現状認識に基づき構築した変革構想（戦略）の内容の分析

——章乃器が「左傾の一条の路」・「孫中山先生の遺囑のなかで唱えられている民族革命」と呼び、「我々はソ連〔のような国家〕になることはできず、トルコ〔のような国家〕にならねばならない」と位置づけた1930年代の変革論⁸⁾の具体的イメージの解明と、それが抗日戦争以後、どのような変遷を

遂げたのか、あるいは遂げなかったのかの検討。およびその変革構想と彼が編み出した変革の方法（戦術）との連関についての分析。

章乃器の活動がもった意味について検討するためには、思想史的な分析のみならず、運動史からのアプローチも必要となる。ここでは、年譜から窺える彼の実践の特徴を指摘しておく。

まず章乃器の人脈について。年譜からもわかるように彼は、西南派（両広派とも言う——広東省の陳済棠、広西省の李宗仁・白崇禧を中心とする）と密接な関係を有していた。両者の関係は、おそらく章乃器と白崇禧（章の兄と同窓）との関係から始まっている。その後、1936年6月の西南事変に際して全救連が両広派からの資金援助を受けたことで、両者の関係はさらに深いものになった。抗戦中、彼が李宗仁の招請を受けて安徽省の省政府財政庁長となる前提条件はこうした人脈によって形成されたと言えよう。

だが、前近代的側面を重視して捉えられがちであった国民党地方実力派と民主人士との関係の深さについては、従来十分に解明されて来たとは言えない。その意味で、青柳純一氏が中華民族革命同盟を民主党派の一つとした姜平氏の著作は、「民主党派と西南軍閥……との関連に留意した」点で類書よりも優れていると指摘したのが注目される⁹⁾。津野田興一氏は、地方実力派の具体的な活動——雲南省の龍雲が民盟主席の張瀾を通じて民主運動に資金援助を行っていたこと——を紹介した。氏は羅隆基が地方実力派の軍事力に依拠して中国の民主化を目指した時期があったことも指摘し、民主人士の変革論の特徴の一端を明らかにしている¹⁰⁾。

こうして現在では地方実力派と民主人士との結びつきの深さも論じられるようになったのであり、章乃器の活動もこの点から分析を進める必要があろう。当時の、民主人士と地方実力派との関係を考察する際、地方実力派の本質規定が重要な問題となる。その際、筆者は従来の通説に囚われることなく彼らの政治活動を実証的に考察することが必要であると考え、まずもって地方実力派の構成を明らかにすることの重要性を痛感している。

たとえば青柳氏の重視する中華民族革命同盟（1935年7・8月～1937年10

月、以下、大同盟）は李济深・陳銘枢・蔡廷鍇らが、“反蔣抗日”を掲げて組織した政治団体であり、彼らは基本的に両広を基盤にした軍人である。大同盟の指導者たちは1933年の福建事変に参加し、36年には西南事変に関与した¹¹⁾。張軍民氏は、大同盟を1932年に宋慶齡らが組織した中国民権保障同盟と共に、「国民党民主派の認識と闘争との歴史発展にとって二つの重要な段階である」とした¹²⁾。また、雲南で民主人士・民主党派を支援した龍雲も、1931年末に成立した西南政務委員会のメンバーであった。

したがって大同盟を民主党派の一つとし、西南派と民主党派・民主人士との繋がり深さを重視する考えにも一定の論拠があるが、章乃器ら救国会派知識人や羅隆基ら『自由評論』に拠った知識人たちと大同盟に結集した人びとの間には本質的な違いが存在したのではなからうか。すくなくとも章乃器や羅隆基らは国民党とは組織的な関係を持たなかったのである。また大同盟を青柳氏のように「西南軍閥」の一つに数えることにも、にわかに賛成しがたい。というのは西南事変に関与したとは言え、国民政府とは異質の国家を樹立しようとした福建事変に参加した大同盟のメンバーの政治的立場は、国民党内の実力派である李宗仁・陳済棠らとは一線を画しているように思われるからである。

共に両広を基盤とした李宗仁・白崇禧らと李济深・陳銘枢らとの間にあった相違点を明らかにしたうえで、彼ら相互の関係および彼らと章乃器らとの関係に分析を進める必要がある。そして、その際、章乃器が1936年の逮捕にあたり、陳誠を通じて蔣介石に釈放を求めようとしたという胡子嬰の回想は、そのまま鵜呑みにして良いかどうか疑問であるが、同郷意識により織りなされる中国社会の人脈の複雑さを示唆しており、重要な指摘だと筆者は考える。個人の政治的立場を越えて機能する人脈の作用を、具体的な歴史の分析のなかでいかに読み込んでいくかが、私たちに課せられた今後の課題だと言えよう。

つぎに彼と民衆運動との関係について。この点に関しては、すでに平野正氏が民主運動の高揚は、民盟の革命への傾斜——国民党打倒の必要性の承認・中共の革命指導権の承認——を促進したと指摘している¹³⁾。平野氏と異なった視点に立つ青柳氏は、民主党派と民衆運動との関係性を重視することで民主党派

の独自性が明らかとなり、民主党派と中共との関係性の重視という視点からは描き得ない歴史像が生み出せると主張した¹⁴⁾。筆者は民衆運動が民主党派・民主人士を中共の政治路線に近づけたか、あるいは相対的に独自の道を歩むことを促したか、について即断は避けたいと考える。重要なことは、より実証を深めることであろう。

たとえば章乃器は重慶における“政治協商会議陪都各界協進会”の組織活動に従事し、国民党系の労働組織と言われる中国労働協会や全国郵務总工会などを“協進会”に参加させるのに成功した。また、陪都各界慶祝政治協商会議成功大会の準備過程で重慶市商会を通じて各同業公会なども連携している。章乃器が係わった“民衆運動”は、ブルジョワ的な団体や前近代的性格を色濃く残していた組織が中心となって展開したものであり、労農大衆や都市貧民層の関いとは異質であるが、彼の活動の社会的基盤を理解する鍵とはなろう。章乃器とブルジョワ的な団体との関係は、彼自身の回想によると1930年代の半ばから始まっており、彼は上海市商会の大礼堂を借りて集会を行うため、市商会の秘書長・嚴譔声と交渉する過程で、彼の民族意識に触れ統一戦線工作に対する新しい認識——「大きく範囲を広げなければならない」という認識——を得たと述べている¹⁵⁾。

註

- (1) 鄒韜奮「経歴」『韜奮文集』3巻（三聯書店、1978年〔原本発行；1937年〕）。また章乃器の個性として特筆されるべきは、彼のモラリストとしての一徹な側面であろう。章乃器の子息である章立凡氏は、幾人かの知識人が他人の罪を暴くことで自らの潔白を明かそうとした文化大革命の最中にあっても、父親が「“無の中から有を生む”ように人を厄災に陥れることはできない」として、1936年段階の上海地下党の指導者の一人であった錢俊瑞が特務であったとする回想録の執筆を断ったことを紹介している（前掲「先父章乃器往事見聞録」）。
- (2) 上海文化会救国会は、上海文化界救国会が正しい。
- (3) 一般に上海文化界救国会の機関誌は『上海文化界救国会会刊』とされている。なお『暴風雨』の日本での所在は確認できなかった。
- (4) 内閣官房内閣調査室編集『中共人民内部の矛盾と整風運動』（大蔵省印刷局、1957年）。

(5) 平野正「1930年代における章乃器の思想とその政治的立場」（『西南学院大学文理論集』18巻1号、1977年）。平野氏は章乃器を救国会の「他の活動家（沈鈞儒・鄭縉奮・陶行知などの知識人・文化人）と区別される特異性がある」人物、すなわち「民族ブルジョワジー」の思想を代表する人物として位置づけた上で、彼が「国民党との癒着を強め、抗日救国会から脱落するにいたった」と述べたが、年譜からも明らかなように章乃器は決して「国民党との癒着を強め」たわけではない。平野氏は“蒋介石の要請に応じて三民主義青年団に関与した”等の反右派闘争時期に現れた章乃器批判を十分な検討を経ず、そのまま踏襲している。筆者は年譜から分かる事実の範囲においても、章乃器の救国会からの離脱は決して「脱落」ではなく、救国会運動の思想的分化の問題の一つと捉えるべきだと考えている。彼の政治的立場を中国の工業化・民主化の一つのコースと捉え返すことは不可能であろうか。

また、平野氏は章乃器の日本帝国主義および国内の封建勢力に対する認識の甘さを彼の限界として指摘している。しかし本年譜でも明らかなように、彼の日本帝国主義批判は1928年より存在していたし、土地問題に関しては1935年に次のように述べて、それなりに農村問題の深刻さに思い到っていた。現在の国民政府の地方統治機構では「紳豪と農民」の間の複雑な土地問題は解決できず、騒乱は免れない。「もし真に農民の満足を求めれば、それはおそらく革命的な手段となるだろう」（『対於土地村公有制之意見』章乃器『激流集』生活書店、1936年、原載；『社会経済月報』1935年10月）。

章乃器の思想に対する分析は、我々に残された今後の課題である。

- (6) 水羽「1950年代における章乃器の言論活動とその挫折——『百花齊放・百家争鳴』から『反右派闘争』へ——」（『史学研究』190号、1990年）、および「現代中国における『愛国』と『民主』——章乃器の軌跡を中心として——」（『現代中国』65号、1991年）。1949年前後から1957年の反右派闘争に至る時期の章乃器の政治的立場については、年譜でほとんど取り上げることをしなかった。拙稿を参照されたい。
- (7) 章乃器「我的研究動機和研究経歴」（前掲『激流集』〔原載『中学生』1936年1月号〕）。なお、「知の体系」・「歴史観（あるいは世界観）」などの用語の使用法は、姫田光義「瞿秋白について」（野沢豊編『中国国民革命史の研究』青木書店、1974年）の叙述を参考にした。
- (8) 章乃器「客観的中国」（『章乃器論文選』生活書店、1934年〔原載；『新社会』1932年8月〕）、同「民族的出路」〔1933.4.16.〕（前掲『章乃器論文選』）、同「民族解放闘争中の幾個最低限度要求」（『永生』1巻8号、1936年4月25日）。
- (9) 青柳純一「中国における民主党派史研究の現状と課題——姜平『中国民主党派史』を中心に——」（『近きに在りて』14号、1988年）
- (10) 津野田興一「羅隆基の戦後民主主義構想——1945年民主同盟臨時全国代表大会との関連で——」（『近きに在りて』19号、1991年）。なお、救国会派知識人も1936年秋には、地方実力派の力を利用して抗日統一戦線を実現しようとする戦術を確立するが、こ

の点に関しては拙稿「抗日知識人の対国民党認識に関する覚書——抗日をめぐる内外政策を中心として——」（『広島大学東洋史研究室報告』6号、1984年）を参照されたい。

- (11) 楊親華ほか主編『中国民主党派史詞典』（中国法政大学出版社、1989年）および田子渝・劉徳軍主編『中国近代軍閥史詞典』（档案出版社、1989年）。
- (12) 張軍民『中国民主党派史（新民主主義時期）』（華夏出版社、1989年）。
- (13) 平野正『中国民主同盟の研究』（研文出版、1983年）。
- (14) 註(9)と同じ。なお青柳氏はこうした観点から「重慶政治協商会議期の和平民主運動と中国第三勢力」（『歴史研究』〔大阪教育大学〕27号、1990年）を発表しているが、この論文も「李公樸の民主救国運動と思想」（『東洋史論』7号、1989年）と同様、「民盟、第三勢力の共産党に対する独自性、主体性は明らかである」ことを一面的に強調しようとしている。筆者も当該時期の民主党派・民主人士の独自性・主体性を否定するものではないが、今日の実証のレベルから言えば、民盟内部に中国共産党員が多数参加し重要な役割を果たしていたことも軽視することはできないと考える（民盟内部の中国共産党員に関しては、前掲津野田論文を参照されたい）。
- (15) 前掲章乃器「我和救国会」

補註

— 章乃器主要著作一覧 —

- (1) 『章乃器論文選』（生活書店、1934年）。
- (2) 『中国貨幣制度往那裡去』（新知書店、1935年、錢俊瑞と共著）。
* 浅川謙次氏の邦訳『支那貨幣論——支那貨幣制度は何處へ行く』（叢文閣、1936年）がある。
- (3) 『激流集』（生活書店、1936年）。
- (4) 『中国貨幣金融問題』（生活書店、1936年）。
- (5) 『国防総動員』（読書生活社、1936年、李公樸らと共著）。
- (6) 『中国经济恐慌与経済改造』（中華書局、1936年、李紫翔らと共著）。
- (7) 『論中国経済的改造——消腫、去腐、新生』（五十年代出版社、1951年）。

なお、『出獄前後』（上海雑誌公司、1937年）については、日本での所在の確認ができなかった。

〔付記〕本年譜は平成3年度文部省科学研究費補助金・奨励研究(A)「1930～40年代における中国知識人に関する基礎的研究」の成果の一部である。

A Chronological table of Chang Nai-ch'i's Life (Version I)

— Between “Nationalism” and “Democracy” in China —

Chang Nai-ch'i (章乃器：1897~1977); he was organizer of All-China Federation of National Salvation Association (全國各界救國連合會), vice chairman of All China Federation of Industry and Commerce (中華全國工商連合會), minister of Food (糧食部部長), vice chairman of Democratic National Consultative Association (中國民主建國會) ...and so on. Chang is one of most important intellectuals in modern Chinese history.

So there are a lot of recollection about him. However there are few analysis of Chang Nai-ch'i's Life. Therefore, I chosen Chang in this chronological table.

When I wrote it, I emphasized next three points;

- (1) details of Chang Nai-ch'i's plitical action,
- (2) meaning of his relation to China Communist Party,
- (3) characteristic of his relation to local power in South-Western China.